

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

# 堅実

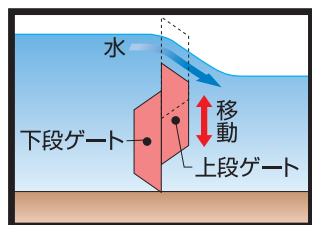
## 日々の積み重ねを大切に



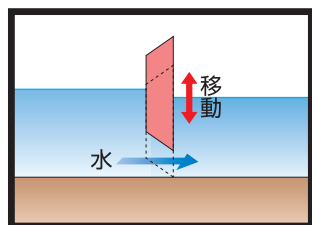
旧吉野川河口堰管理所では、全国で唯一「三湛二落<sup>さんたんにらく</sup>」という特殊な堰の操作を行っているらしい。一体どんな操作なのだろう？今年も3月から始まる三湛二落の操作開始を目前に日々奔走する山本に密着！

### 河口堰のゲート操作

調節門



制水門



※緑着色部：吉野川流域

旧吉野川河口堰管理所の主要施設は、<sup>いまぎれがわ</sup>今切川河口堰、旧吉野川河口堰の2つの堰。これらは、堰上流域への海水遡上（流入）を防止し、水道・工業・農業用水の安定的な取水を可能とすることで地域の暮らし、経済、産業の発展に大きく寄与するとともに、洪水を安全に流下させる役割も果たしている。

### Profile

旧吉野川河口堰管理所 企画調整グループ

### 山本 純 Jun Yamamoto

平成4年水資源開発公団（現水資源機構）入社。霞ヶ浦用水（茨城県）、筑後川下流用水（福岡県）で用水路の設計等を経験。香川用水、豊川用水（愛知県）では、震災対策や用水路建設、水管理等に従事。出向経験も豊富で、東海農政局では大島ダムの建設を、東北農政局では河川協議等を担当。平成24年4月より現職。

### 全国で唯一！「三湛二落」操作

徳島市街地から車で10分ほど北上すると、まず吉野川、続いて今切川が姿をみせる。管理所に到着早々、山本から堰の管理について、丁寧な説明を受ける。

「今切川河口堰と旧吉野川河口堰で実施している三湛二落操作とは、かんがい期（3月1日～9月30日）に5日間周期で堰操作を行うことです。3日間は農業用水の取水や塩害防止のため堰上流の水位を維持し（三湛）、残りの2日間は低地からの排水を行うため、堰上流の水位を堰下流の潮位に合わせて下げる干満操作（二落）を行います。非かんがい期（10月1日～2月末）は干満操作を行います。」



今切川河口堰

なるほど、操作の大枠が見えてきた。でも、5日間のサイクルが決まっているから、操作は難しくないのでは？そんな疑問が湧いてくる。

「たしかに平常時は、堰下流の潮位と堰上流水位の動きに応じた指示事項を毎日、朝と夕方の2回、コンピューターに入力することによって自動運用が可能です。しかし、いつも計画どおりに水位が動くとは限りません。堰上流水位の管理は、堰下流の潮位に影響されるため、潮位の動きによっては計画どおりに上流水位が下がらないことや逆に下がり過ぎることがあります。その結果、堰上流水位が管理水位を超えて上昇し、低地部において浸水被害が発生したり、管理水位まで水位が回復せず、農業用水の取水が困難な状況になったりします。こうした事態を防ぐため、職員が手動でゲート操作を行うなど適正な管理運用を図ります。このように堰の管理すべてがコンピューター任せというわけにはいかず、最後は我々職員の力が必要です。このため、日頃から潮の動きや水位、天候には絶えず気を配るようにしています。」

最後に頼りになるのは、職員の経験と技術。ここに山本ら職員自らが管理にあたらなければならない鍵がある。



堰コンの点検を行う山本

堰コン（堰管理用制御処理設備）

## 毎日が勉強です

堰の管理で、日頃からの準備はあるのだろうか？再び、山本が口を開く。

「堰の運用にあたっては、関係機関との調整が欠かせません。関係機関が年末に毎年集まり、『旧吉野川河口堰等管理運営協議会』が開催されます。そこでは、河口堰の管理運用方針について議論されます。臨時の協議会も必要に応じて開かれており、昨年8月の渇水時には、「二落」操作を行わず、堰上流の水位を維持する運用方針が決定されました。これもひとえに関係者の皆様に、河口堰の運用をよく理解いただき、現実的な対応を取っていただけたおかげです」と安堵の表情を浮かべた。



「関係機関の皆様には、日頃から率先して情報提供を心掛けています。河口堰の管理について逆に質問攻めにあうこともあります。それは自分にとって絶好の勉強の場でもあるので、河口堰へ興味を持ってくださる方が増えるきっかけになればと思いますね」。山本は、河口堰の広報マンの一面もみせる。

## 被災から得た教訓

東日本大震災当時、東北農政局に出向していた山本は庁舎内で被災。「机は横滑り、壁も損傷するなど、悲惨な状況でした」。この経験から、危機管理、特に減災の大切さに気付かされたという。

「被災しない施設がベストですが、被災を想定した迅速な河口堰機能の回復手法や代替機能（関係機関対応）を機構内部に止まらず、地域レベルで検討し情報共有しておくことが重要です。我々が管理する2つの河口堰は沿岸部にあるため、津波による被災の可能性を現在照査中です」と力を込める。

「もしもの時」に備える危機管理対策と同時に、施設の長寿命化にも熱意を抱く。

「河口堰等の施設は、関係する皆様からお預かりしていると思って管理しています。適確かつ早めの対策を実施し、施設を末永く使用できるよう維持管理していくため、第一弾として今年度から建設後40年を経過した土木構造物の機能調査に着手しています。」

最後まで淀みなく穏やかに説明してくれた山本には、堰管理への確かな自信が感じられた。当たり前のことを確実に。山本ら職員の日々の積み重ねが、管理の現場を支える原動力になっている。

### ～山本の機構志望動機～

「たまたま手に取った占いの本に『水商売』に向いていると書かれていて、その足で求人票を見に行くと、『水資源開発公団』の名前があったので、「これだ!」と思い即決で応募しました。入社して22年、水資源機構に入社して本当に正解でしたね」と笑顔の山本。

最後に一言。「好奇心旺盛で潮来トリアスロン(茨城県)を完走するぐらいの粘り強い精神力を持った皆さんの水資源機構入社をお待ちしております。」

